

## 2005年冬に思う

渡邊正之

本当の意味で先生にお会いしたのは、昭和41年(1966)の夏、7月です。先生が新潟南高等学校の理科の教師で、私はまだ大学生でした。すでに「じねんじょ会」は発足していました。新潟大学農学部の旧校舎、新潟市河渡の植物病理学教室で1月4日に新年会が開かれていました。先生のお顔を拝見する機会は何回かあったように思い出します。植物採集そのものに関心がありませんでしたので、遠くからお顔を見ているだけでした。

植物病理学教室で、応用昆虫専攻の同級生の高村晴元(故人)さんと夏休みになったらという話をしていました。山岳部8年生の彼に、機会があったらぜひ飯豊山に連れて行って欲しいと頼んでいました。そんなとき、用があったまま石沢進先生が教室に入って来られました。飯豊山の話の続きから、高村さんが「じねんじょ会はぜひ飯豊山の植物調査をやるべきだ。飯豊のような大きな山塊の植物調査は、とてもひとりやふたりの仕事では出来ない」「新潟県を代表する山なんだから」と力説したのです。

数日後、この話は急展開に進みました。そんな案内人がいるのなら、夏休みになってすぐにも出かけようということになりました。磐越西線の日出谷駅から入る実川登山道が選ばれました。当時の実川の集落は、新潟から出かけたときは鉄道でしか入れませんでした。両隣の駅とは山越えの歩く道はあっても、自動車の通る道路はありません。ここから入山する登山者の数も知れたものです。実川から大日岳へと突き上げるおんべ松尾根は、急登が続き長いよと聞いていました。そこを登る計画です。みんながそれぞれに予定が決まっている中で、1泊2日の日程です。

当日、新潟駅のホームに集合したのは4人です。池上先生と石沢先生、高村、渡邊です。池上先生の大きなキスリングがとても印象に残りました。茶色の厚手の布地で作られた横長のザックです。特大サイズです。大学の山岳部で長期合宿の際にごく普通に使われていましたので、大きさとしては見慣れたものでした。4つ折りにした新聞紙が楽に入ります。そのザックが腰にぶら下がっている感じです。肩ひもがゆるんでいて、背中にザックが背負われているのではなく、ザックの底そのものが腰に当たっています。普通なら、その状態はとても歩きづらいはずです。でも、ザックの中にたくさんの標本が入ってからも、先生のザックの担ぎ方は変わりませんでした。

日出谷の駅前に2台のタクシーが客待ちをしていました。タクシーはこの2台しかないと聞いていました。実川沿いに進み、堰堤のところまでタクシーを降りて、本当の登山道に入ります。まだ午後の陽は高く、晴れた夏空です。

池上先生と石沢先生は足を踏み入れたばかりの樹林帯の中でとどまったままです。先生方が夢中になっている様子を高村さんとふたりで見学していました。しばらくして、ゆっくり先に進んでいますと断りを入れて先生方に背を向けました。無人の湯の島小屋には明るい内に到着しました。樹林帯の中の小屋は陽当たりが今ひとつです。蚊が多くて、早速蚊取り線香をたきました。薄暗くなる前に夕食の準備が整いました。先生方おふたりが小屋に到着されたのは、真っ暗になってからです。おんべ松尾根を上がって大日岳、御西岳に向かうのは4日後の次回にしようということで、このときは尾根に足を向けずに帰りました。

翌日からは、植物病理学教室恒例の旅行で、尾瀬に入りました。銀山湖を船で渡って燧ヶ岳と至仏山に登りました。教室で一緒の名畑清信さんがテントの中で、帰ったらすぐ飯豊に行くと言っていました。私は逆に、1日休まないと身体が持ちそうもないあと弱音を吐いていました。

1日遅れて再び日出谷の駅に降り立ちました。先日泊まったばかりの湯の島小屋は素通りしておんべ松尾根に取り付きました。元気がよかったのはここまでだったようです。展望の開けた斜面の途中にテントが張りっぱなしになっていました。黄色で厚い布地の屋根方テントです。支柱には木を使っていました。中をのぞくと、標本を挟んだ新聞紙の束がポリ袋に入れられて、いくつもシートに並べてありました。ホルマリンの臭いが強烈です。ポリ袋の中にホルマリン液をたらしておく、暑い夏でも紙の取り替えをしなくても標本が何日間は大丈夫だという話を聞いていました。結局、このテントの片隅に寝袋を広げてしまいました。翌朝の寝覚めは余りよくなかったと記憶しています。朝食後、出発しないままに時間ばかりがどんどん過ぎ去っていきます。まわりに沢山咲いているヒメサユリの花を堪能したことだけに満足して、ゆっくりと湯の島小屋に引き返しました。小屋に着くと、さらに1日遅れて後を追って来た先輩の西山邦夫さんと出会いました。

池上先生と2回一緒になるはずでしたが、2回目は私の方が逃げてしまいました。

じねんじょ会で恒例になった飯豊連峰の植物調査の第1回目は、このようにして始まりました。

それから6・7年後、十日町市役所から電話をもらいました。秋の土曜日、指定された場所に出向くと数人が集まっていました。その中に池上先生がおられて、今日と明日十日町市近郷の植物調査をすることになったと話されまし

た。あの人は動物の担当だし、この人は地質を専門にしていると紹介してくれます。私には写真を撮るように指示がありました。

大賀の古代ハスの咲いている池では、花びらを白い柔らかな紙で丁寧に包んでいました。

道端から刈り払われたクズの葉を拾い上げて、これくらい

しおれていた方が押し葉にするのには都合がいいとおっしゃっていました。

黒姫山ドリーネでの採集会や湖底に沈んでしまった三面集落から入った朝日連峰なども、池上先生の思い出が沢山浮かんできます。

## 北方文化博物館伊藤文吉館長さんと池上先生御家族の出会い

西山邦夫

池上キクさんの伊藤館長さん宛のお手紙

伊藤文吉館長さんからのおたよりで、池上先生の御家族との出会いがあり、さらに以下の交流のあった事を知りました。その経過を御紹介します。伊藤館長さんは、池上先生の教え子で長年にわたり、親しくおつき合いをされており、標本の行き先を心配されているお方です。

### 1 2004年11月25日

伊藤文吉館長さんから私宛に「はがき」がきました。内容は、池上先生の奥さんと娘さんであるキクさんが北方博物館を訪れ、声をかけられて、偶然出会った事が記されました。また、池上先生の幸西の御自宅には、まだ、沢山の植物標本や本、文献類があるが、今後どうなるか、とありました。

### 2 2004年11月26日

伊藤館長さんに電話をしましたが、旅行中で留守でした。11月29日に連絡がつき、池上先生の標本や本、文献の今後の行き先について、知っている事をお話しました。

### 3 2004年12月1日

伊藤館長さんの要請で、名古屋にお住いのキクさんにお電話をし、池上先生の標本や本、文献の今後の行き先について、知っている事をお話しました。

### 4 2004年12月25日

伊藤館長さんから、キクさんが、伊藤館長さんに宛たお手紙と池上先生のお写真、先生のことを紹介した新聞のコピーが、私に送られて来ました。

伊藤館長さんの御意向は、これは「池上先生の御遺族の大切な資料であり、自分の手元に置くより、じねんじょ会員のところで利用活用した方がよい。」との判断でした。

池上先生と伊藤館長さんとの師弟関係、また、御家族の池上先生の標本にたいする思いもあるので、キクさんの御諒承のもと、ここにお手紙とお写真を御紹介いたします。

拝啓

先日は思いかけずお会いすることができ、驚き、うれしうございました。それに御多用の中、早速に亡父のために西山先生にコンタクトをとっていただき、ありがとうございました。帰名後、まず伊藤様にお便りを、といただいた名刺をテーブルの上に置いていたものの、先にお葉書をいただいしまい恐縮です。早速西山先生にお電話させていただきました。

あの日11月23日は、父の誕生日の翌日で、珍しいほどの好天気がまず母と私を動かしました。“バスでどこかへ”と母を誘うと、“体調がおぼつかい”と断ることの多い母が珍しく話にのり、とりあえず二人でバスセンターへ行きました。(母は、本年四月から新潟駅近くの、高齢者対応型のマンションに移り、幸西の家とを歩きまわっております)。

私の頭にあった岩室温泉、月岡温泉、新潟ロシア村等のバスはいずれも廃止されており、それではこの際にと、北方博物館行となった次第です。

そちらへは、私はかつて父と一度、参観させていただいたことがあり、越後の縄文土器とエジプトの小さな涙壺が記憶に残っております。母は父から度々お話を聞いておりながら、まだお訪ねする機会がなかったのです。

バスを降り、土手の下でおにぎりをほおぼりながら、のどかな田園風景を堪能して、秋の光と色彩の美しい、歴史が積まれているあの空間に向かったのです。

母が「今、文吉さん(父は「ブンキチ」と呼び捨てで語る)ので、家族がたしなめるのですが、改めませんでした。でも“わが子”“わが友”の響きがあったので、どうぞお許してください。」と思われる方が通って行かれた」と私に声をかけた時は、「そう?」、広間で説明をされている場に出会った時も、「ご本人だろうか、ご兄弟等お身内の方だろうか?」と半信半疑だったのですが、お話をお聞きしている中でご本人と分かり、声をかけさせていただいたのでした。

大病後、そう間もない時期と知り、お会いできたことを